

説教「ルツの信仰」

ルツ記 1:7~19

2004.9.5

日本バプテスト同盟 横浜南キリスト教会

主の御名をほめたたえます。2ヶ月振りに皆さんと共に礼拝をささげる幸いを神に感謝し、ご出席の皆さんの上に、そのご家族の上に、神の豊かな恵みがありますよう、主のみ名により祝福いたします。前回はナオミさんの信仰を語りましたが、今回はルツの立場に立って語り、ルツに注目したいと思います。

ルツ記はわずか4章から成る小さな書物ですが、その内容は優れたものです。特に一つ一つの場面は、舞台上で演じられる劇を見る思いがいたします。実際、ドラマです。ドラマを見る観衆の一人になって、彼女らの仕草に注目しましょう。特に、今日のルツとナオミの会話のやり取りは印象的です。

前回申しましたように、ナオミさんはモアブという異国の地に移住しましたが、そこで夫を失いました。さらに10年後には二人の息子までも失ってしまい、踏んだり蹴ったりで途方に暮れてしまいます。しかしその頃、故郷のベツレヘムでは飢饉^{ききん}はもはや過ぎ去ったことを知らされると、故郷のベツレヘムに帰ろうと決意をし、未亡人となった息子たちの二人のお嫁さんと連れ立って、帰国に途につきました。

しかし、ナオミさんは道々考えました。二人の息子の嫁は若くして未亡人となってしまった。この若い将来のある娘たちを自分の国と一緒に連れて帰ってよいものだろうか、疑問を感じ始めた。そして、立ち止まってこう言います。8節、「あなた方は自分の里に帰りなさい。あなた方はわたしの息子にも、またわたしに対してもよく尽くしてくれた」。そう礼を述べ、これからもその良い業に主が報いて恵みを与えてくださいますようにと祈り、そしてはっきりと申します。新しい嫁^{とつ}ぎ先を与えられて幸せな家庭を築くようにと、愛情に満ちた奨めをするのであります。そして、ナオミは二人の娘に別れの口づけをします。

すると、彼女たちは声を上げて泣くのであります。彼女たちは言います。いいえ、あなたとご一緒に、あなたの民のところへ行きますと答えたのです。しかし11節、ナオミさんが彼女たちに強く言

います。「帰りなさい！」と。

そして、彼女たちを国元モアブの実家へ帰るようにと奨める、その理由をはっきりさせます。わたしには、もうあなたの夫になるような子供はいませんし、これからもそういう望みはないのです。

なぜこのように言うのか一寸説明が必要ですが、イスラエルの古くからのしきたりで、長男の兄弟がいれば、兄弟が兄の奥さんと結婚をして、兄のために子供を儲け、子孫を兄に代わって育てる義務がありました。これを義兄弟結婚と言います。彼らにはこの規定があった。(申命 25 : 5)

ナオミさんはそういうしきたりのことを、ここで言っているのです。ナオミさんに他に息子がいれば、彼女たちと結婚させるのですが、そういう男の子は他にいません。仮にナオミさんに子供を産む望みがあって、別の男と結婚して、そして男の子が生まれたとしても、その子が大きくなるまであなたたちは待つつもりですか。娘たちよ、そんなことがあってはなりません。ですから、わたしと一緒にベツレヘムに来て、結婚して幸せになる望みは全くありません。わたしの言うことが分かるでしょうと、噛んで含めるように説得します。

ナオミさんは、自分に付いてこようとする嫁たちに、「モアブの実家に帰ることが一番いいのです。あなたたちのゆえに わたしは大変辛いのです。ベツレヘムと一緒に付いて来たって幸せになれないのですから。わたしたちの家族に 主がこういう不幸を下したのですから、仕方がないのですよ」と言った。

このように 14 節、懇々と諭すので、二人は再び声を上げて大泣きし、そして二人のうちオルパは泣く泣く「姑」に別れの口づけをすると、帰っていくのであります。しかし、もう一人の嫁のルツはナオミに縋り付いて離れなかった、14 節。

そこでナオミさんは、縋り付くルツに、更に言葉を強めて申します。「相嫁のオルパは自分の民、自分の神のもとへ帰って行ったでしょう。モアブの国の人にはその国の民族モアブ人がおり、モアブの神がありました。さあ、あなたもオルパの後を追って行きなさい」と、ナオミさんは熱心にルツを説得しようとします。それに対して、ルツの答えはナオミさんの熱心さを跳ね返しています。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください」と。ルツの決意にはとても固いものがあります。日本的な表現で言うならば、「お言葉を返すようですけど」というところでしょうか。

先程 ナオミさんが、あなたの相嫁のオルパさんは、わたしの奨めに従って、自分の民、自分の神のもとへ帰って行ったでしょう。あなたもそうしなさいと言ったんですね。ですが、その言葉を逆手にとってといいですか、ルツは申します。「あなたの民はわたしの民です、あなたの神はわたしの神です」と、はっきり自分の決意を言明したのです。

ルツにとっては、かつての生まれ育った自分の民、自分の神をここで否定したのです。今は違う、あなたの民・あなたの神がわたしの民・わたしの神です。ですから、相嫁のように自分の民、自分の神のもとに帰れという、ナオミさんの説得は根拠を失うのです。ここにルツの立場が極めて明瞭に、はっきりした意志をもって打ち出されました。

この信仰の告白とも言うべき、あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神という言明は、形式的な言明ではありません。身も心もナオミ様、あなたとわたしは一つです。一心同体という言葉の通りですが、あなたの行くところに わたしも行きます。あなたが泊まるところに、わたしも泊まります。

17 節、ルツはさらに言葉を強めて、あなたが亡くなるところに、わたしも死んだら そこに一緒に葬ってもらいます。死んで別れる以外に、あなたから離れることは断じてありません。神かけて誓いますと言うのです。そして、もしあなたから離れることがあったとしたら、神の呪いがわたしに下っても構いません。決して別れることはないとの誓いの表現です。

18 節を見ますと、ルツのこれらの言葉を聞いたとき、さすがのナオミさんも、それ以上に帰れとルツに強く奨める思いが失われてしまいました。ですから 18 節、ナオミはルツと一緒にいきますという固い決意の前に、言葉を失い、説き伏せることを断念したのです。

ここにナオミさんとルツさんの、火花を散らすような激しい対話が交わされています。それは憎しみや敵意からではなく、全く反対です。その結果はナオミさんの沈黙となった次第です。このように、説得に努めたナオミさんがその説得を断念するほどにルツさんの決意には固いものがあり、ナオミさんと同じ民・同じ神を自分の民とし自分の神としますという、ルツの信仰告白がその支えとなっていました。

この執念にも近いルツさんの姑さんへの思慕の念は、何時から芽生えたのでしょうか。ナオミさんの息子と結婚して 10 年の間に、姑のナオミさんとの間に何か起きたのか記されていません。ただ 8 節に、ナオミさんが二人の嫁に別れの言葉を発したとき、「あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた」とあります。短い言葉ですが、10 年間共に暮らしてきた真実の交わりをうかがい知ることができます。

ここ 8 節のところは原文に則して話しますと、「あなたたちが死んだ者たちにも（つまり二人の息子にも）、そしてこのわたしにもしてくれたそのように主があなたたちに真実（ヘセド）をもってなさってくださいるように」となります。ヘセドとは真実とか慈しみ、誠実な愛といった意味で、神様のイスラエルに対する恵み深い真実な行為もヘセドと言います。

ですから、ナオミさんと二人のお嫁さんとの深い関係は、恐らくナオミさんの信仰、イスラエルの神のヘセドに生きた信仰に触れて、10年の間に培われてきたものと考えられます。

ナオミさんが二人の嫁を国元に帰そうとしたのは、二人の幸せを願う親心でありました。ですからオルパさんは国に帰って行きましたが、ナオミさんの真実な愛を汲み取り、泣きながらも帰って行ったのです。その態度をわたしたちは決して非難する必要はありません。

しかし、ルツさんのナオミさんへの思いは、ナオミさんを離れては考えられないものになっていました。ナオミさんは50歳くらいとしても、当時としては身寄りのない老いたやもめでありました。ですから、ルツにとって、この姑のナオミさんを独りでベツレヘムに帰らせるわけにはいかない。助けてやらなくてはいけない。その一心がそこにはあったと思います。

そして、「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神」という信仰告白により、あなた・ナオミ様と同じ民族をわたしの民族と考え、あなたの神をわたしの神と信じて、あなたと運命を共にする人生を生きていきますという、信仰の決断をいたしました。

かつての異邦人ルツは、今やイスラエルの神を信じ、この神に従って、この神の民の一員として生きることを表明しました。ですから、このルツの信仰の告白は形だけのものではなく、姑のナオミさんを慕い、仕え、愛し抜いて、一生涯共に生きていこうとする信仰の表明であります。

2章2節、ベツレヘムに二人が落ち着いたその翌朝から、ルツは、丁度 大麦の収穫が始まったばかりの季節でしたから、早速 ナオミさんの許しを得て、貧しい者に許されている落穂拾いに出かけています。嫁・姑の関係というトラブルを起こすことが当たり前の社会の中で、ルツの姑に対する愛と真実の行為はさすがすがしい思いを、劇として見る者に、またこれを書物として読む者にも与えてやまないのであります。姑に仕えるルツはこれからどんな働きをし、どんなことが自分に起きてくるかは次回のお楽しみとします。

この後 主の晩餐に与りますが、イエス様は愛と真実をもって、しかも御自分の命を一人一人に与えてくださいました。それはルツの愛の奉仕を完全な形で実現してくれたものであります。

[参考]

義兄弟結婚

創世記 38章：ユダとタマル

「ユダは長男のエルに、タマルという嫁を迎えたが、ユダの長男エルは主の意に反したので、主は彼を殺された。ユダはオナンに言った。『兄嫁のところに入り、兄弟の義務を果たし、兄のために子孫をのこしなさい。』」(38：6～8)

申命記 25 章：家族の存続

「兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡父の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の生んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない」(25：5、6)